

# 教師と学校支援ボランティアの相互理解の重要性

—神奈川県相模原市立A小学校の取り組みに着目して—

石塚 彩 恵\*・西村 吉 弘\*\*

## Importance to mutual understanding between teacher and volunteer

-Focused on activity in the A elementary school of Sagamihara city in Kanagawa prefecture

ISHIZUKA Sae and NISHIMURA Yoshihiro

### Abstract

Today, it has been said that it is very important for family and community as school-support volunteer to work together with the elementary and junior high school for improving educational activities. Especially, in helping children to learn and to put up school events, this volunteer needs to cooperate with them and teachers. In previous studies on this issue, it put emphasis on the importance of acting independently with school, family and community. But we think it is necessary to find out and enhance the sense of educational activities in caring about school, family and community.

Therefore, this paper examines the case of the discussion on activities in the small elementary school of Sagamihara city in Kanagawa prefecture. And in this research, we had a few interviews with school principal and teachers, school volunteers.

The results are as follows: to understand mutually between school, family and community in educational activities, school and teacher recognize family and community to being brought out the best in children. And family and community view school and teacher as being drawn out the best.

Keywords: school-support volunteer, cooperation and school, family and community, educational activities, school events, mutual understanding, authority in principals

### 1. はじめに

近年、学校、家庭、地域の連携の重要性が指摘され、その三者の取り組みは学校評議員や学校運営協議会、学校関係者評価の「学校経営参画」と学校支援ボランティア活動や学校支援地域本部事業(以下、地域本部事業と略)の「学校支援」に見られる<sup>1</sup>。2008年度に導入された地域本部事業は、「学校・家庭・地域が一体となって地域ぐるみで子どもを育てる体制」を整備するため、「地域住民が学校を支援する、これまでの取り組みを更に発展させて組織的なものとし学校の求めと地域の力をマッチングし、より効果的な学校支援を行う」事業<sup>2</sup>である。教師の負担軽減や多様な教育活動の充実等、「第一義的には学校の教育活動の支援」を目的とし、「地域の教育機

---

キーワード：学校支援ボランティア、学校・家庭・地域の連携、教育活動、学校行事、相互理解、校長の権限

\*平成18年度生 人間発達科学専攻

\*\*国立教育政策研究所 非常勤職員

能を地域住民の力を活用しながら学校を中心に再構築」することを目指している。

地域本部事業は、学校やPTA、地域コーディネーター、社会教育関係者や自治会等の地域関係者で構成される地域教育協議会のもと、地域コーディネーターが学校と学校支援ボランティアとの連絡調整を図り、連携活動を展開する形態である。その際、学校には地域の教育力を踏まえ地域ぐるみで子どもを育てる意識や地域に貢献する意識、学校の地域との連携に対する理解、地域の教育力を取り入れるマネジメント能力等、学校の意識改革や校長のリーダーシップが求められ、家庭や地域には子どもの教育に主体的に参加する中で学校の仕組みや教育方針を理解し、学校のニーズに対応した支援が求められている。このように、学校、家庭、地域が共に子どもの教育環境をつくることに主眼が置かれ、三者の相互理解を深める関係を構築する必要性が指摘されている。

このような中で、学校と地域の関係づくりへの指摘が幾つか見られる。佐藤は学校が地域との関係をつくる3つの要素（「対等性」、「恒常性」、「互酬性」<sup>3</sup>）を取り上げ、日常的にメリットの持てる関係を構築することで、効率的で創発的な活動に繋がりが相乗効果が期待できるとしている。また、柏木は教師と地域住民の主体形成の観点から、教師と地域住民が参加する「自由な意思疎通の場」で生まれる「対立や葛藤」を学校と地域双方が積極的に捉え認め合うことが必要であると指摘する<sup>4</sup>。これらは、子どもの教育環境形成における学校、家庭、地域との関係づくりの必要性を挙げている。しかし、地域本部事業において、学校は地域ぐるみで子どもを育てる意識など地域との連携に対する理解、家庭や地域は学校の教育方針や子どもの状況の把握など学校に対する理解が求められている中で、子どもの教育環境を形成するためには、子どもの成長を中心に据えて三者が互いに関係をつくることが重要ではないだろうか。その中で、廣瀬は教育責任の分担を基盤とした協働の観点から、学校の情報公開による学校運営への住民参画を促し、学校や家庭を含む地域相互の自立性を確保し尊重し合うことで、学校の教育環境を創造することが重要であると指摘する<sup>5</sup>。学校の情報公開によって、家庭や地域が子どもの教育責任を担う当事者意識を促す点で重要だと考えられるが、学校、家庭、地域が子どもの成長を確認する中で当事者意識が生まれ、三者の相互理解を育むことに繋がるのではないだろうか。

そこで、本稿では神奈川県相模原市立A小学校（以下、A小学校と略）の取り組みを対象とする。B校長のもと、2005年4月から2009年3月にかけて、A小学校内の組織を変革することで地域と連携するための環境整備に着手し、その上で学校支援ボランティア活動を中心的に担った婦人会に協力を要請し連携を推進した。また、授業に婦人会が参加したことは、A小学校の実践の向上のみならず婦人会自身の活性化にも繋がり、そのことが地域的な活動の拡充へと繋がっていた。その婦人会は、学校と家庭や地域のコーディネーターの役割を担い、A小学校との連携に際して窓口となって活動を展開することになる。これらの連携において、三者は子どもの成長を確認する中で子どもの教育環境をつくる意識が芽生えていた。このように、地域本部事業の導入以前から子どもの成長を目的に、学校、家庭、地域が連携するための学校経営が推進されていったのである。

学校、家庭、地域が子どもの成長を捉える際に、立場が異なればその着眼点に相違が生じることが考えられる。A小学校では、この点をすり合わせるため学校行事や授業を中心とした連携を展開し、更に学校経営計画の重点項目として位置付け、それを教師はもとより地域住民に情報公開することで連携の契機とした。これを通して、子どもの成長を捉える視点の共有化に取り組んでいることから、三者が連携を推進する際に育む相互理解が進展した要因を明らかにすることができるのではないだろうか。したがって、A小学校の取り組みから、子どもの成長を軸とした連携活動を学校と地域の両面から捉えることで、双方の連携に対する理解の芽生えとその要因を検討することを踏まえ、教師と学校支援ボランティアの相互理解の重要性を明らかにする。

## 2. 神奈川県相模原市立A小学校の取り組みと研究方法

### 2-1. A小学校の取り組みの概要<sup>6</sup>

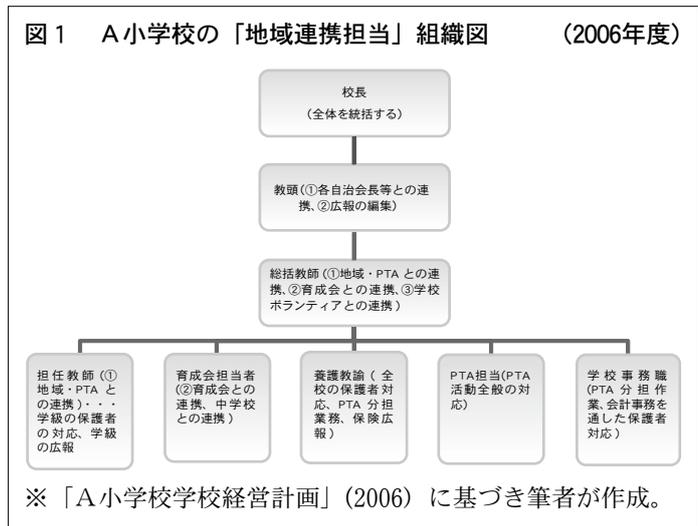
A小学校は、2009年時点で児童数18人、教職員は12名（管理職含む）の創立130年を超える小規模小学校である<sup>7</sup>。相模原市中心部からは、南西におよそ25kmであり、山梨県との県境の山間部に位置している。

2005年4月に赴任したB校長は、「地域と共に生きる学校」を学校経営の理念の中核に据えた。学校経営方針の重点項目は、①特色ある学校づくり（保護者・地域との連携）、②基礎学力の充実・個性の伸長、③教師の資質の向上（校内研究・研修・評価—授業を中核として—）、の3点を挙げている。これらに見られるように、第

1に保護者や地域との連携を見据えていたことが分かる<sup>8</sup>。実際に、学校が連携を進めるためにB校長が始めに着手したのは、学校組織の改革であり、次の2点が挙げられる。1つは、教頭の職務に「地域連携の窓口」という役割を設け、学校の外部機関や外部講師との調整、そして広報「学校便り かけはし」（以下、「かけはし」と略）の編集長の役割を明確化した点にある。2つは、「総括教師」のポストを設けた点にある。総括教師は、管理職（校長・教頭）と教師の間を取り持つ中間管理職の立場である。この職務にも、「関係団体や地域の諸会合への参加・対応」が明示されており、教頭同様に地域との連携推進に向けた役割を担った。このように、教頭と総括教師が中心となり、A小学校の地域連携に向けた職務を明確化させていった。

次に、校務分掌で「地域連携担当」を配置し、教師の職務を明確化した上で組織した点である。図1を見ると、校長を筆頭に教頭→総括教師→それぞれの担当教職員と組織づけていた。地域連携の職務を見ると、まず教頭がA小学校の地区の自治会連絡協議会会長との連携、「かけはし」の編集を担っている。地域住民に対しては総括教師が主に対応しており、教頭と総括教師間の調整が地域全体との連携に向けた中心的な位置付けとなっている。そして、総括教師が担当する職務を他の教師が補佐し、より具現化する構図である。これらの活動は、地域との連携促進に向けて広報活動を通じて地域住民への情報発信へと繋がっていく。

図1 A小学校の「地域連携担当」組織図 (2006年度)



このように、地域連携担当者を配置する上で、教頭や総括教師が中心となり連携の窓口になっている。ここで特徴的なことは、校務分掌に明記し一人ひとりの職務を明確に位置付け、教職員全員が地域連携担当者として役割を担った点である。また、教職員全員が地域連携の職務の中で相互に関連性を持ち、組織全体で相乗的な取り組みを目指したのである。

A小学校の重要な情報発信源である「かけはし」は、毎月1回発行され、教頭を中心に教職員全員による編集体制を取っていた。また、執筆者は教職員だけでなく、地域住民（学校支援ボランティアや婦人会等の地域団体の関係者、等）も含まれ、情報公開は学校内にとどまらず、地域を含めたより広範な話題が地域住民に提供されたのである<sup>9</sup>。

A小学校では、上述した重点項目の②と③の実現のため校内研究では表現活動（朗読発表）を取り入れ、年間16回開催され、更に学習発表会等も素材として研修する仕組みを作った<sup>10</sup>。この教育実践の成果は、朗読発表会が毎年12月に開催され地域に開かれていく。また、朗読発表会に参加した地域住民の感想は、予め配られた感想用紙に記入され当日のうちに回収された。そして、「かけはし」を通じて、教師の実践への見解と共に地域住民の感想も地域全体に発信され、A小学校の取り組みに地域住民が触れ理解するための機会となったのである。

## 2-2. 学校支援ボランティアの概要—A小学校地区婦人会の紹介

A小学校には、保護者を中心とした図書ボランティアだけでなく、朗読発表会や運動会等の学校行事に関わる婦人会や体育振興協議会、等があり、学校の内外を問わず地域との連携が図られていった。その中心的な団体が、婦人会であった。B校長の赴任以前も、学習発表会といった学校行事の際、毎年恒例の地元舞踊の指導等に学校支援ボランティアとして学校に参加していたが、授業の中で連携活動を行うには至らなかった。

婦人会は、1949年に創設された組織で、全国地域婦人団体連絡協議会に加盟していた。役員のお多くは、A小学校の卒業生である。創設時180名程いた会員は、2010年時点で30名と減少し、役員年齢が50代以上と高齢化したため、活動の休止・解散が検討されていた地域団体である<sup>11</sup>。また、児童数が減少し規模が縮小したため、2005年4月から小・中連合PTAとなり新しい組織として活動し始めた。A小学校区は、新組織以前から保護者・地域住民共に子どもを育てる意識は高かったが、PTA組織の再編成を契機として一層その機運が高まっていった。

尚、この小・中連合PTAに地域団体（婦人会も含む）も含む形態を採り、PTA、地域住民問わず役員を兼務している。特に、婦人会代表のCさんは学校と家庭や地域のコーディネーターの役割を担い、A小学校との連携に際して窓口となっていた。

このように、A小学校区ではPTAと婦人会は実質的に同一集団として活動を行い、地域全体でA小学校を支える仕組みが基盤にあった。婦人会活動は、①地区内関係、②文化、③健康管理、④体育・レク、⑤社会奉仕、⑥他の地域委員会との関わり、の大別して6つの活動を行っている。特に、社会奉仕の分野でA小学校と関係を築いている。A小学校への婦人会の関わりは4章で詳述するが、学習発表会のような学校の中核行事以外に、森林教室、編み物指導、地産地消のうどん作り、手巻き寿司教室、田植えなどの活動を、学校支援ボランティアとして保護者や教師と共に日々の授業の中で共同で行っていた。

### 2-3. インタビューと研究方法

校長、教師、婦人会代表と役員へのインタビュー記録と「かけはし」から、学校の地域に対する意識と地域の学校に対する意識をそれぞれ見ていく<sup>12</sup>。

インタビューは、B校長（50代男性）に対し2009年3月23日、同12月4日、2010年3月31日、同9月21日、教師は2名（Fさん：30代女性・4年生担任、Gさん：50代女性・総括教師）に対し、2009年3月23日にA小学校で行った。また、婦人会に対しては、2010年4月1日に婦人会代表1名（Cさん：60代女性）へのインタビュー、同8月24日にCさんを含む婦人会役員5名（50～60代女性）のグループインタビューを、それぞれCさんの自宅で実施した。いずれも半構造化面接法を用いた。インタビュー記録は、談話分析を用いて検討する。

B校長は、A小学校の校長赴任以前、1995年から1997年まで指導主事<sup>13</sup>としてA小学校やその地域に関わり、その後教頭として1998年から2000年までA小学校に赴任した。更に、2001年から2005年まで教育次長を務め、その間、A小学校や校区に関わりを持っていった。そのため、A小学校やその地域の実状を熟知していたのである。

婦人会代表のCさんは、A小学校の出身者でPTAの役員経験者でもあり、B校長とはA小学校長への赴任以前から良好な関係を築いていた。赴任後は、次第に学校行事だけでなく年間5、6回程度学校の授業などに関わるようになっていった。

以下では、B校長やCさんを中心に、教師と学校支援ボランティアの意識から、学校が地域との連携を進めるためにどのように教師や地域に働きかけたのか、それを受けて地域はどのように受け止めて支援したのかを検討する。

## 3. 学校の学校支援ボランティアに対する理解—B校長を中心とした教師の意識に注目して

A小学校の地域との連携は、B校長が2005年4月に赴任し「地域と共に生きる学校」を学校経営目標に掲げた所から始まった。B校長はその理由を「かけはし」の創刊号の中で以下のように記している。

（学校が）地域に「今」できることは何かと考えています。私達一人ひとりが「かけはし」となった時に何ができるかを探りながら学校として生き続けて行きたい。学校も地域も共に生きがいをもって、「生き続ける」・「行き続ける」ことを考え、そしてできる所から形に表したい…このような思い・願いをもって学校の舵取りをしていく決意です。  
（かけはし 2005.6.28 発行）

B校長は学校運営に関して、今のA小学校を取り巻く地域に対する学校の役割を意識し、学校と地域が互いに生きがいを感じながら行き交う場を目指し取り組むことを伝えた。そして、地域との連携を進めるために、「教育実践の改革と開示」と「広報による地域住民への情報公開」に取り組んでいく。B校長はA小学校に赴任直後の状況について次のように語っている。

地域の方は、「学校が最近元気ない。小学校と地域も話し合いがうまくいっていない」と言う…(話す中で)地域住民は「小さな小学校だから仕方ない」と思っている…保護者は元気ないし、教育が成り立つのか心配していました。この、消沈した雰囲気を変えるには、我々は単に教職の立場で良い(事をやっている)と言うのではなく、誰が見ても良いと言うんだと…「地域と共に生きる学校」を一貫して4年間の柱にしようと思ったんです。(2010.3.31 インタビュー記録)

子どもが保護者、祖父母の中で生まれていることを先生方が十分に意識した上で、今持っている子ども達の力を引き出して発表することで、(保護者や地域住民の)理解や協力を得られるようにする…子どもが素晴らしいことを保護者(や地域住民)に了解してもらい、子どもが安心して過ごす教育を一生懸命にやらなければならないんです。(2009.12.4 インタビュー記録)

このように、B校長は就任直後に保護者や地域住民と話す中で、A小学校と地域との間の隔たりを認識していた。更に、保護者や地域住民は学校に不信感があり、またA小学校は小規模校であるため、教育が成立するの不安を感じていた。Fさん、Gさんも「地域が離れ始めている時で、地域の人が子どもや学校に対して白けていて、子どもは委縮する(と思った)」、「(子どもが進学して)大きな集団に入った時に、自分を出せるのか保護者は心配しています」(2009.3.23 インタビュー記録)と述べていた。それらの発言から、教師は保護者や地域住民が子どもの教育に不安を抱えており、子どもの成長を考えると不安を感じていたのである。

A小学校を取り巻く状況は好ましくなかったが、B校長はこの状況を変えるため学校の取り組みを教師と子どもの中に留めるのではなく、保護者や地域住民の視点を踏まえて「地域と共に生きる学校」を学校経営目標に据えた。そして、子どもの成長と保護者や地域住民の不安を考慮し、朗読発表会を中心に教師、保護者、地域住民が相互に子どもの成長を確認できる取り組みを実施したのである。B校長は、朗読発表会、授業や校内研究会等にも地域住民に参加してもらい、取り組み内容を「かけはし」を通して広く公開し参加を呼び掛けていった。

しかし、保護者や地域住民の視点を取り入れ、学校の教育活動に取り組むことは必ずしも教師に受け入れられなかった。B校長は教師の受け止め方について、次のように述べている。

子どもが今抱えている課題を越えていく物の1つに朗読発表会があり…表現力を磨いていく経験や大きな人数を想定して様々な経験を積ませていく…(それに対して教師は)率直に言えば消極的でした…先生方が引き受けたのは、保護者や地域の人から寄せられる感想が素晴らしいからです。自分達が消極的だったイベントが、こんな風に保護者から受け止められる。地域(住民に対して)も同じですね。(2009.12.4 インタビュー記録)

私は、教頭に「これ(かけはしの編集)をやして下さい」と言ったのにやらない…「私がやると、学校全体でやることにはならないから、教頭にやってもらいたい」、「地域を歩くと、地域の色々な声が聞こえてくるよ」と(伝えました)。(2010.3.31 インタビュー記録)

これらの発言に見られるように、朗読発表会の実施や「かけはし」の編集・配布等について、当初、教師は学校の活動や子どもが成長する機会を保護者や地域住民と共有することに、違和感や不安があったことが伺える。その教師の姿勢について、B校長は「かけはし」の編集・配布にあたって、教師自身が保護者や地域住民の声を聴く姿勢が重要であり、教師自らが地域に出向き配布し地域を知ろうとする努力に対して、地域住民は受け入れてくれると伝えたのである。また、B校長は「学習発表会や朗読発表会で…(朗読の指導等を教師に対して)率先して講師をやり、教師として自分ができることを探っています」(2010.3.31 インタビュー記録)と述べているように、発表会の準備や指導の仕方を単に傍観・批評するのではなく、朗読の指導の仕方等を自ら伝える中で子どもの成長を地域に伝える際の教師の違和感や不安を解消していった。このように、B校長自身が他の教師への役割を意識して教師を支援することで、「地域と共に生きる学校」という目標に近づける努力を積み重ねていたのである。

これらの活動を、Gさんは次のように述べている。「(朗読発表会等の)当日になると、プラスαの力が子ども達に出ます。私達は『(地域の人が子どもの力が凄いと)言って下さるから、もっと頑張らなきゃ』と思った。

私達も力をもらって相乗効果、双方向の力が（出る）。一人ひとりの成長が毎年確認できるという言葉を受けます」（2009.3.23インタビュー記録）。この発言にあるように、地域住民の反応から学校行事が教師自身だけでなく、保護者や地域住民にとっても子どもの成長を確認する意味があることを実感したのである。また、教師自身にとっては、普段と違う子どもの側面を見ることで、その成長に気づき、参加する保護者や地域住民の存在によって引き出されることを認識する契機となったと考えられる。

更に、こうした地域の反応からFさんやGさんは「保護者や地域の方は、新しい人が来るのが、地域全体の新しい力に繋がるという意識がある」、「A小に来て下さる（保護者や地域住民の）方々は、『今年の子供達はどうか』と熱い思いを持って来てくれる…（先生方の）持っている力は（子ども達に）全部置いて下さいという（感じです）」（2009.3.23 インタビュー記録）と語っている。これらの発言に見られるように、地域住民が自分たちを子どもの可能性を引き出す存在として捉えていることを教師自身が感じ取っているのである。

朗読発表会、学習発表会などに取り組んでいく中で、教師自ら地域住民と共に活動したいと提案したが、その1つが婦人会との連携であった。B校長は「私に、G先生、F先生達から『（保護者だけではなく婦人会も）6年生の会食会にお手伝い頂きましょう』と提案してきました。Cさんに頼んで、OKが出たんです。（婦人会は）やってみたら、『こんなに楽しいことはない』と…その間に学習発表会や朗読発表会に来る…そこに集まる人が増えて、気持ちの入れ方が違うんです」（2010.3.31 インタビュー記録）と語っている。Gさん自身、「地域を受け入れる…柔軟さや小さい学校の良さを受け入れて考えると、自ずと良い所が見えてくる」（2009.3.23 インタビュー記録）と述べているように、次第に学校の「外」に目を向け保護者や地域住民を受け入れた上で、授業への参加を依頼するなど地域住民へ働きかけていったのである。

それにより、Gさんをはじめ教師が取り組みを依頼する際、小・中連合PTAに地域住民が関わっていることを踏まえ、婦人会への依頼が良いのではないかと、主体的に考えることに繋がったと考えられる。それは校長のトップダウンではなく、教師自身が主体的に地域との連携を模索し始めてきており、当初B校長が経営理念に掲げていた「地域と共に生きる学校」づくりが、教師個々人の意識の中に芽生えてきたことが伺える。この背景には、教師自身が学校行事での地域住民の学校に対する期待や、日常の会話を通じて地域住民の学校に対する思いを把握することが可能となったからであると考えられる。

その要因として、次の2点が挙げられる。第1は、学校行事や日常での地域住民との関わりを通じて、教師と地域住民との間で子どもの好ましい変化を互いに受け止め確認した点である。学校行事等の子どもの姿から、地域住民は子どもの成長を直に感じ、その子どもの成長のみに意識を傾注するのではなく、成長を支えた教師の日々の活動を見ているのである。他方、保護者や地域住民が学校行事等に参加し学校を支えることで、教師は普段見えない子どもの新たな側面に触れ、子どもの成長が地域住民の存在によっても引き出されていることを実感している。双方が、それぞれ「子どもの成長」に目を向け、その先に他者の存在を認識し、その重要性を理解しているのである。つまり、教師の活動、地域住民の活動、といった抽象的な他者の行為を見るのではなく、子どもの成長した姿を確認することを通して他者の存在を具体的に意識したことで、双方にそれぞれ繋がりを持つための意識が芽生えたのである。

第2は、教師自身が連携の意義を学びとり、A小学校を取り巻く地域の存在の重要性に気づいた点である。B校長は、赴任直後に地域の状況を把握した上で、学校組織の人的環境整備に着手した。そして、連携推進の学校経営計画を打ち出したが、それは授業を中心とした実践を鍵とし、教師の職務とも合致するものである。その際、B校長自身も率先して実践に取り組み、教師の広範な職務の肥大化を防ぎながら、授業の実践と連携の推進を一体化させていた。これらの流れの中で、教師自身の実践の成果を地域に開き、地域住民自身のA小学校に対する姿勢を直視することで、教師は自ら地域の存在の重要性に気づいていったのである。このように、「地域と共に生きる学校」を学校経営計画の重点項目に位置付け徹底し、実践を地域に公開することで、その重要性について教師自らが学ぶ機会を構築しており、教師の主体性を引き出していったと考えられるのである。

#### 4. 学校支援ボランティアの学校に対する理解の深まり—Cさんの意識に注目して

Cさんは、先述したように婦人会活動の一環として地元舞踊の指導を行う等、毎年恒例の学校行事を中心に活

動を行っていた。B校長の赴任後、「活動する中で、婦人会の活動は地域の中で必要だと感じた」（2010.4.1 インタビュー記録）と語っており、徐々に活動を広げていった。B校長が赴任する前の状況について、Cさんは「学校との繋がりは（学校の運動会で行う地元舞踊の指導以外）あまりなかった…私達に子どもも孫もなく、学校の様子も分からないし、行事の時に行く程度でした」（2010.4.1 インタビュー記録）と述べている。Cさんをはじめ、婦人会は地域と学校が合同で行う運動会で接点はあったが、それ以外に学校に足を運ぶ機会は稀有だった。学校の取り組みに関心を持ちにくく、学校を知る状況にはなかったのである。

また、婦人会活動について「(会員の)人数が少なくなり…活動もマンネリ化して『年齢的にも大変だから止めよう』という話もありました…(地域では)子どもが減り、地域を活性化したいという思いはあったと思います」（2010.4.1 インタビュー記録）と語っており、地域の活性化を望んだが、会員が減少する中で婦人会の活動を活かす機会や場所に恵まれず、次の展開を見出すきっかけがなかった。その中で、学校から朗読発表会等への参加依頼だけでなく、教頭やGさんからエコたわしづくりの協力依頼を受けたことを契機に、婦人会は学校の学習活動に関わることになる。学校の活動へ参加したことについて、Cさんは次のように語っている。

B校長先生の方針について最初は漠然と見ていたんですが、(朗読発表会など)3年続けて見ると、段々子ども達も生き生きして、地域の人達も凄い感動を覚えて…少ない人数でもこんなに子ども達が元気になるんだと感じました…色々な行事(や授業)をする際に学校から呼び掛けて頂き、「私達ができることは何だろうか」という気持ちになった。  
(2010.4.1 インタビュー記録)

(うどん作りの際に)子どもや先生から「分からないことが理解できた」、「一緒に作れて嬉しい」、「柔らか過ぎた」という評価を頂いた…(その後、婦人会の)皆で今日はどうだったかという話をしました。「時間がかかった所を変えればもっと早くできる」、「粉が多すぎた。次回は減らそう」という準備の仕方、「会員以外の人達にも声を掛けよう」と(活動に参加協力の依頼について)婦人会の中での評価もありました。  
(2010.8.24 インタビュー記録)

このように、朗読発表会や授業等の活動に参加し子どもの様子を直接見る中で、徐々に学校の取り組みや子ども達の状況を学び、子どもの成長や考え方を受け止めていることが伺える。これは、「(子どもと関わると)思いがけないことが分かる…子ども達に少し教えるだけで…『やればできる』と思った」（2010.4.1 インタビュー記録）という発言からも垣間見ることができる。また、授業の中で教師や子どもから評価を受け、時間配分や材料の準備、参加者の確保といった事前準備の仕方に配慮が必要であることを婦人会の中でふり返っているのである。

学校と関わる婦人会活動に対し、婦人会メンバーは保護者や地域住民に積極的に声を掛けるようになる。Cさんは「『かけはし』が配布されて、学校の様子も分かるし、色々な所で『かけはし』の話をしました。今までの色々な婦人会活動も皆が活動に集まるようになりました…『学校の行事があるから都合どうですか』と聞くと、『この前かけはしに載っていたね』という話になり、婦人会活動も本当に楽になりました」（2010.4.1 インタビュー記録）と述べている。この発言に見られるように、学校と婦人会が共同で実施した活動は「かけはし」を通して地域住民同士の共通の話題になっただけでなく、学校に関わる婦人会活動やその内容が伝わることで、次第に学校や婦人会活動に参加する保護者や地域住民が現れるようになったのである。その状況から、「かけはし」を通じて婦人会活動を伝える意味を確認することになり、学校から地域への働きかけが婦人会活動にも繋がったことを実感したのである。

こうした取り組みを続ける中で、学校の教育活動に関わる意味を次のように語っている。

小学校に関わる中で、私達ができることを受け入れる所がまだあるんだと思った。役員だけでなく…活動を(JA婦人部や相模原市の)広報に載せたり、(保護者や地域住民等の)非会員の方に声を掛けて(活動を広めて)いこうと。(学校に関わる中で)教育方針は昔と違う部分もありましたが、やれば何かできると元気づけられました。  
(2010.8.24 インタビュー記録)

一つひとつの積み重ねで繋がりが新しく出来た感じですが。私達は、色々な広報活動で地域に「学校に目を向けて下さい」という先生の気持ちがこの地域の人達に伝わったと思う…「かけはし」を通じて地域の方に伝えて下さり、婦人会活動の中にまで入って頂いて、(婦人)会が1つにまとまったと感じました。

(2010.4.1 インタビュー記録)

(婦人会)役員改選の際、「私達の会は地域に必要なではないか」と意見が出て活動を続けることになりました…その中で「学校は人数が少ない中で先生が本当に頑張ってる…1つでも協力できるなら、婦人會も協力すべきではないか」と話が出ました。

(2010.4.1 インタビュー記録)

これらの発言に見られるように、学校の活動に関わり続ける中で子どもや教師はもちろんのこと地域住民同士の関係の構築に気づき、婦人会活動の意味を再認識していったと考えられる。学校の働きかけで活動に参加したが、活動を広く伝えるための積極的な働きかけは、学校の活動だけではなく婦人会活動の関心を高めるためにも重要であり、婦人会の中でも他者に自分達の活動の関心を高める働きかけが必要だと気づいたのである。

それらを通して、婦人会は自分達の活動と学校の活動を重ね合わせ、学校が行事や授業等の中で地域に働きかけた取り組みの背景に、教師達の尽力があったことを再確認したと考えられるのである。一つひとつの活動における教師や子どもとの関わりを通して、婦人会のメンバーの中でも子どもの反応や教師の対応を受け止めた上で、改めて活動内容を再確認し次の展開へと向かう意識が芽生え始めたことが伺える。それは、「地域と共に生きる学校」を目指した活動に対して、婦人会は「学校と共に歩いた」(2010.8.24 インタビュー記録)という協働性の構築を実感することに繋がったと考えられるのである。

このように、婦人会はA小学校の活動における連携を通して協働性を実感しているが、その要因として次の点が挙げられる。学校行事や授業に参加し、直に子どもの成長や参加した地域住民の姿に触れることで、A小学校の姿勢を受け止め、その中で婦人会としてA小学校に関わる意義を考えた点である。この見解から、婦人会が参加する中で、教師や子どもに貢献可能な連携について考えている。それは、婦人会の復興というよりも、活動を通して教師や子どもから評価をもらい、それをふり返ることで、よりの確な連携を婦人会自身も模索していったのである。また、学校行事や授業への関わりはその都度1回きりであったが、婦人会は教師の配慮や子どもの評価を受け、婦人会活動を次回に繋がるための話し合いを行ったことで、学校と地域の連携において、双方が循環した見解を持つことになった。それは、婦人会の活動への取り組みが、A小学校だけではなく、地域住民同士の関係にも寄与することにも繋がっている。そこで、婦人会の活動が「かけはし」に掲載され、地域に対してA小学校を通じた情報発信を行うことで、A小学校と婦人会が一体となった取り組みになっている。その中でも、婦人会は教師の地域への働きかけの重要性を強く実感しており、その姿を確認できたことが、A小学校と共同で行う活動の原動力となったと考えられるのである。

## 5. 考察とまとめ

以上、A小学校の教師と婦人会の関わりを通じた連携から見える相互理解の重要性について見てきた。ここからは、次の2点が挙げられる。

第1は、当初、教師は地域との関係性の悪化とそれに伴う子どもへの影響に対する不安を抱え、地域は地域自体の衰退や学校に対する不安を持っていた中で、A小学校の連携を通して子どもに直に触れ、子どもの新たな側面が引き出された点で子どもの好ましい成長(変化)を受け止め確認した点である。B校長が掲げた学校経営計画によって、学習発表会はもとより、校内研究の成果として朗読発表会や授業の中での体験学習に至っても、教師は常に地域に内容を開くことが求められていた。その中で、教師は子どもの指導に臨んだが、教師が見たものは子どもの成長のみならず、地域住民が学校へ関わることの意義であった。この点から、地域住民との関わりを教師自身が考える機会となっており、それが地域住民と共同で学習活動を行うことの意味を感じ取るための重要な一要素となったのである。地域住民にとっても、同様のことが確認された。学校行事や授業の開示・連携は、普段関わる機会の少ない子どもの成長に触れる数少ない場である。この場に参加することで、子どもの成長や新

たな一面に触れ子どもの姿を理解すると共に普段見えない教師の実践への姿勢を読みとっている。このように、教師と地域住民との間で子どもの成長を受け止め相互確認したことが、学校と学校支援ボランティアの相互理解を育む一助となったと考えられる。そして、その機会を構築したことが、B校長のリーダーシップの核となる部分であり、教師集団全体の向上へと導いた。また、地域も同様に向上へと導いたことで、連携の基盤を強固なものへと推進していくためのコーディネーターとしての役割も担っていたのである。

第2は、婦人会の活動に見られるように、地域に対する働きかけから教師を受け止める姿勢があった点である。婦人会の活動は、A小学校の「かけはし」を通して、地域全体へと広がりを見せた。そこから、地域住民間の関係向上に繋がったことに気づき、その背景に教師の地域に対する支援の姿勢を垣間見たのである。それは、教師の姿だけではなく、地域住民同士の関係向上が1つの鍵になり、その背景に教師の尽力した姿を読みとったのである。ここでは、教師と地域住民の関係が構築されていたことを基盤としながらも、A小学校周辺地域の活性化から、学校から提示される情報だけでは捉えにくい教師の支援を感じとったのである。この点から、地域住民は更なるA小学校への支援へと機運が高まり、ひいては教師との連携を一層密なものにするための支援とそのため自己理解を育んでいったのである。

以上、A小学校では、連携の先に子どもの成長した姿が見え、そして地域自体の活性化が見えたことで、教育活動を通して学校と地域が共に子どもの成長を受け止めて確認し合い、教育活動の支援の意義に気づくことができた。そして、それを基盤として連携の意義や目的を明確化し共有することが可能になった結果、少なくとも当初学校と地域がそれぞれ抱いていた不安を払拭したことが、相互理解を深めるための連携を図る一助となったと考えられる。

今回のA小学校の事例では、教師は広範な分掌が整理され、職務の肥大化を抑えた上で実践を通じた活動を行い、地域は実生活に根ざした分野の範囲内で連携への支援を行った。双方が連携する際、それぞれの特徴を活かし活動を展開しており、A小学校に限らず、学校や地域によって多様な特徴を持っていることを考慮すれば、相互理解を育むための機会もまた、学校ごとに独自に構築する可能性を示唆している。

他方、A小学校では学校と地域共に、当初は他者に対する懸念を持つことから始まり、必ずしも良好な関係性の中で連携が生まれていったわけではなく、連携活動はむしろその打開策として機能していた。よって、連携する際の接地点を考慮すれば、学校と地域が共有していた課題が解消された時、発展的な連携やその継続性にまで繋がるのか、更なる検証が求められよう。

※本稿の執筆分担は、次の通りである。

- 1、2-2、2-3、4…石塚彩恵 2-1、3、5…西村吉弘

## 【注】

- 1 佐藤晴雄「“双方向”の連携・協力をどうすすめるか」、『教職研修』、2009、26-29頁
- 2 文部科学省HP「みんなで支える学校 みんなで育てる子ども」—「学校支援地域本部事業」のスタートに当たって」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/01\\_1/08052911/004/002.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/004/002.htm)
- 3 前掲1。
- 4 柏木智子「学校と地域の連携推進に関する研究」、『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第35号、2009、67頁
- 5 廣瀬隆人「地域社会と学校の協働を探る—『地域人材の活用』から『学校支援ボランティア』へ」、『教育展望』47巻、教育調査研究所、2001、31-35頁
- 6 本章では、次の資料を参考にしている。『A小学校 学校経営計画』（2006～2008）
- 7 児童数は、1945年の330人をピークに減少し、2009年は1945年対比で94.5%減である。
- 8 経営方針は、重点項目以外に、①創造的な教育課程の編成、②機動力を重視した校内組織の編成、③望ましい人間関係を目指す特別教育活動、等を挙げている。
- 9 学校経営計画では、「かけはし」に関して①教職員全員の編集体制、②「地域と共に生きる学校」を実現するものは全て受け入れる編集姿勢、③地域内の執筆者の発掘、等を掲げている。
- 10 『A小学校校内研究のまとめ 校内研究集録』2008年度を参照。

- 11 2009年時点で、A小学校区の人口は581人、戸数は228戸である。
- 12 インタビュー記録は、匿名性を守るためアルファベットを用いて表記する。インタビュー内容は、再現性を保障するため全てICレコーダーに録音し、逐語的に書き起こし内容確認も行っている。本稿で、インタビュー記録を引用する場合は、次の凡例に基づいている。  
凡例：（ ）は筆者による補足説明。発言中の「……」は前後の発言の省略。引用後の（ ）はデータの出所、記録した年月日。尚、発言は文意を損ねない程度の修正を加えた上で引用している。
- 13 旧相模原市と合併前の旧町教育委員会に所属していた。